

「私が考える健康住宅とは」

2009.8

健康住宅ディレクター

金堀健一

近年提案されている住宅のカタログを見ていると、耐震性に始まり耐火性、高気密高断熱による省エネ性や防犯性、メンテナンス性といった「性能」の良さがPRされている。高性能＝良質な住宅だといっている。住宅を車の様に工業化してしまったことにより、住宅の価値観が、供給側も購入者側も性能の良し悪しという評価になってしまったからであろう。

衣食住の中でも、日本は特に「住」の質が低いと言われている。衣（ファッション）や食（和食）は世界でもトップクラスの評価を得ているのに対し、今の日本の「住」を評価されることはない。日本車は低燃費で高性能である故海外での販売がこの不況の中でも好調であり、高い評価を得ている。しかし住宅建築はいくら高性能であっても、良質であるとは言えないのではないだろうか。古民家や神社仏閣といった古建築は評価されているが、今の造られている多くの住宅建築には日本らしさ（日本の文化）が失われていて魅力が乏しいのである。新興住宅街の中に入ると、プロバンス風からアメリカン、北欧風から南国風、そして丸太小屋があり、色彩もさまざま。一体どこの国にいるのか分からない、無国籍住宅群である。しかも、外壁の多くは窯業系のサイディングで覆われていて、「煉瓦っぽい」「塗り壁っぽい」「コンクリート打ち放しっぽい」化粧がされており、まるで期間限定の張りぼてを見ているようだ。プロバンス地方に住む人が、プロバンス風の日本の住宅を見たら一体どう思うだろうか。まだ30年前に建てられたグレーのリシン吹き付けで覆われた「出しゃばっていない」デザインの住宅の方がマシである。今の日本の住宅や住宅群はとても健康的（健全）な状態とは言えないだろう。

「健康」の定義は、辞書によると「“人間”の体と精神が健全な状態であること」である。「健康住宅」は造語だと思われるが、住宅が造られることにより、地球・住宅・人間がそれぞれ健康になることが必要である。

地球を健康にする為には、エネルギーの消費を抑えることでCO2の発生量を抑制し、地球温暖化を防止することが必要である。建築時の運搬エネルギーや生産エネルギー、そして使用エネルギー、廃棄エネルギーをあまり消費しないように、ライフサイクルエネルギーの小さい住宅を造る必要がある。

住宅を健康にする為には、長持ちする構造とデザインが必要である。今の建築基準法を順守すれば構造的には全く問題ない。万に1の強烈な地震を想定させ、社会の不安を逆利用して過剰な構造堅固商品を謳うのは、あらゆる不幸を想定した過剰な高額保険の加入を

促すのと他ならない。長持ちするデザインとは、気候風土に適した日本の文化を踏襲したものであり、施主が長く使いたいと思う飽きのこない愛着の持てるデザインである。長持ちさせるということは、過剰に堅固な構造を造ったり、プラスチック・新建材を用いて物理的耐用年数を高めるということではなく、日本の神社仏閣のようにメンテナンスを繰り返し、経年変化により価値が高まる建築を造るということである。無論ここでいうデザインは土着文化の中から生まれるものであり、気候風土に適した建築は地域により変化すべきである。又、逆に言うと同地域に建てられた住宅群は、デザインに統一感が出てくるのが必然であり、街並みを形成する群として社会的責任を持っているとも言えるだろう。

人間を健康にする為には、ストレス社会である今日、癒しの住まいが望ましい。自然素材を用い、見て触れて心地よく、深呼吸したくなるような住まいが理想的である。高気密24時間換気設備で作りに出されるクリーンルームより、自然の風が流れ込み、自然を感じられる空間の方が心地良い。冷暖房システムによって作りに出される年中同じ条件の温熱環境よりも、夏は少々暑く、冬は少々寒いくらいの方が丈夫で健康的な人間が育成される。

3つの健康の中で、健康住宅を普及させるために最も重要視しなくてはならないのは、人間の健康である。人間は幸福になる為に生きているのであり、幸福である為の条件は人間の精神や身体健康と深く関係する。逆に言うと人間が不健康な状態であれば住宅や地球の健康を創造する余裕などないはずである。人間が心身ともに健康になる為の住まいを創造し、それが住宅の健康、そして地球の健康につながっていくのが理想的である。

地球も住宅も人間も皆、自然環境の中で生かされている。持続可能な地球環境を守るためにも、自然に近い材料や構造・形状で、自然の風雨や温熱環境と適切な範囲で共生した、自然を身近に感じることができる人間にとって心地よい住まいが、私の理想とする健康住宅である。